

科研費学術変革領域研究(A)「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築:世界の分断をのりこえる戦略知の創造」(略称「イスラーム信頼学」、2020—2024 年度、領域代表・黒木英充・東外大 AA 研)の概要

本研究は、イスラーム文明が水平方向の人間関係づくりに長けてきた特質に注目し、そのコネクティビティの蓄積と信頼構築の諸相を洗い出し、そこから明らかになる暗黙知を、言語化・可視化して戦略知として表現し、現代世界にて深刻化する分断状況を解決するための、新たな視座を確立し、提言するものです。

イスラームを軸にして、コネクティビティの現場で信頼が創り出されるプロセスを、1400 年の時間と地球全体の空間を視野にいれて洗い出します。こうした水平方向の関係づくりの問題は、垂直方向の権力関係構築の問題に比べると、イスラーム研究者が何となく意識しつつも、研究の俎上に載せてこなかったものです。また従来の信頼研究においても取り上げられていない、新しい研究領域であり、この課題に諸学問分野の研究者が協働して取り組む、地域研究の大規模プロジェクトで、以下、総括班と7つの計画研究班により構成されます。

研究項目 A は主にコネクティビティの観点から、

A01「イスラーム経済のモビリティと普遍性」班(代表・長岡慎介・京都大学)は、ポスト資本主義の時代を見据えた、普遍的戦略知としてのイスラーム経済知のコネクティビティを扱います。その構成要素の起源が多面的であるからこそ、汎用性が高く、伝わる力が強いと考え、他の文明圏の経済知と協働しながら、イスラーム経済から将来ビジョンを地球社会全体に向けて打ち出します。(研究分担者:五十嵐大介、岩崎葉子、亀谷学、安田慎、小茄子川歩、平野美佐、町北朋洋)

A02「イスラームの知の変換」班(代表・野田仁・東外大 AA 研)は、言語・文書を通じた交渉・仲介の現場のコネクティビティを扱います。境界領域における学知の翻訳、国際商業の取引、イスラーム法廷での紛争解決をテーマに、多面的世界における言語とコードの変換プロセスに注目し、他者との融和的な関係を構築するための実践知を掘り起こします。

(研究分担者:中西竜也、坪井祐司、矢島洋一、高野さやか、濱本真美、和田郁子、高松洋一)

A03「移民・難民とコミュニティ形成」班(代表・黒木英充・東外大 AA 研)は、現代の移民・難民の多くがムスリムであることから、彼らの新たなコミュニティ形成の現場に光を当てます。移民難民が移動先の受入れ社会に対して積極的に働きかけ、国境を越えたコネクティビティを通じて、越境的な主体として立ち現れる過程を描き出します。

(研究分担者:池田昭光、子島進、岡井宏文、中野祥子、村上忠良、昔農英明、長有紀枝)

研究項目 B は主に信頼構築の観点から、

B01「イスラーム共同体の理念と国家体系」班(代表・近藤信彰・東外大 AA 研)は、イスラーム諸

国家を支えたエリート間、および国家間のコネクティビティと信頼構築を扱います。イスラーム共同体の理念を根本的に問い直し、国家間の関係性の歴史を描き出すことにより、従来の「イスラーム世界」概念を刷新する、新しいイスラーム国家体系論を確立します。

(研究分担者: 太田信宏、秋葉淳、真下裕之、長縄宣博、黛秋津、堀井優、馬場多聞、沖祐太郎)

B02「思想と戦略が織りなす信頼構築」班(代表・山根聡・大阪大学)は、分断された世界に向き合うムスリムたちが、信頼構築のために創り出す思想と戦略知を解明します。イスラーム的価値観に基づく思想が異教徒との関係に広がるときの、「したたかさの暗黙知」を言語化し、現代の分断と不信をのりこえる知恵を提示します。

(研究分担者: 飯塚正人、中溝和弥、青山弘之、工藤正子、菅原由美、池田一人)

B03「紛争影響地域における信頼・平和構築」班(代表・石井正子・立教大学)は、現代の紛争影響地域におけるムスリムたちを対象に、分離運動と上からの分断、コネクティビティの活性化と越境的支援、イデオロギー間対話と仲介者をテーマとします。紛争下の人々が平和構築に向かう戦略知を、紛争現場の中から発掘し、新たな秩序形成のために提示します。

(研究分担者: 小副川琢、日下部尚徳、熊倉潤、佐原哲也、鈴木啓之、武内進一、飛内悠子、見市建)

C01「デジタルヒューマニティーズ的手法によるコネクティビティ分析」班(代表・熊倉和歌子・東外大AA研)は、インド洋から北アフリカにかけて広がる地域の、歴史的人名録の中に立ち現れる「コネクティビティ」と「信頼構築」の様態を分析し、それらの多様性と多義性の中に共通する「イスラーム的」なあり方を抽出します。また、この作業を通じて人文情報学的なテキスト分析の手法を開発するとともに、A01 から B03 までの各班の研究活動と連携して「コネクティビティと信頼構築の質的分析の手法」についても研究します。

(研究分担者: 新井和広、伊藤隆郎、篠田知暁、石田友梨、後藤寛、Alexander Mallett、永崎研宣)

さらに、評価委員として、加藤博、鷹木恵子、三浦徹が参画します。

現在の人口趨勢からすると、50年後の世界ではイスラームが世界最大の宗教人口となります。その人口重心はアジア・アフリカ地域にありながらも、ムスリムは世界全域で、コネクティビティを発揮して信頼を構築する活動を展開していると推測されます。その意味で、世界各地で(イスラームをめぐる)分断が深刻化する現在、コネクティビティを通じて地球社会全体の問題に取り組む本研究は、ますます重要になると考えます。今後の国際社会における日本の針路を考えるためにも、正確なチャートを描けるような学術の基盤を若手研究者とともに確立することを、本研究は目標としております。